

☆「安息日に水腫の人を癒す」記事を、福音書記者ルカは簡潔に、また印象深く記す。ファリサイ派の議員宅で、安息日に居合わせた病人を主イエスが癒すかどうか、固唾を飲んで見守るファリサイ派の律法学者たち。それを先刻承知で主は敢えて癒してみせられる。「安息日に病人を癒すのは律法違反か」「あなたの息子が井戸に落ちたら助けられないのか」この主の2度の問いに、彼らは沈黙し、答えない。彼らはこの記事では一切発言していない。しかし、その彼らの内面を容易に読者は想像できる。「この男は何とかせねばならぬ！」と。

☆安息日に人を癒してよいかどうか、という議論は当時、律法学者の間でも意見が分かれていた。ただ是にせよ、不可にせよ、そういう議論がなされること自体、この安息日律法が異常であることの証拠である。安息日が本来、恵み深い人道的なものであったのを、むしろ人々を縛り付ける掟・安息日律法に変えていったのがかの律法学者たちに他ならない。

☆安息日の基本は、6日間働いて7日目には休む、である。今日ではごく当たり前の七曜制であるが、古代の世界では人々は月に1日くらいしか休みはなかったことを考えれば、画期的な制度であった。しかも旧約で最も古い律法・契約の書では、7日目に仕事をやめるのは、「あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである」と。つまり安息日は、日ごろこき使われている奴隷や家畜を休ませるため！驚くべき規定である。

☆どうしてこのような安息日を設けたのか。やはりヘブライ人がエジプトで自ら奴隷であった体験に原点があろう。弱い立場の雇人や家畜たちに配慮するよう雇い主に求めたのである。主なる神が導き出して下さった「出エジプトの出来事を記念するため」と申命記には記されている。また出エジプト記 20 章の十戒第 4 戒の解説では、天地造の神が6日間働いて7日目に休まれたように、安息日は神の安息であって、私たちその：恵みに与るという理解も記されている。いずれにしても元来の安息日は恵みに満ちたまさに「安息」の日であった。

☆その後、ユダヤ教では様々な歴史的な経緯を経て、律法学者たちが権力を握る過程で、律法が陥りやすい罠にはまって細かい規定を作ってゆく。主イエスの時代にはおよそ600もの規定が設けられたという。安息日に働いてはならないとは、商売をしない、荷物を運ぶな、何歩以上歩くな、火を使うな、等々。律法学者たちは、慈しみ深い神を仰がず、十戒の掟を神と仰ぐことで、民衆を掟で縛りつけ、その上に胡坐をかいて権力を振るったのである。

☆現在も、ユダヤ教の保守派をはじめ、イスラムの原理主義者たち、コーランを極端に解釈して民衆、女性を縛り付ける「法学者」が今なお支配権を握っている。一方でキリスト教が世界に広まり、主の日を休む日曜日が世界に広まり、多くの人に解放をもたらした。でも今なお、労働者をこき使うブラック企業、学校教師の長時間労働が問題視されている。あの人道的な安息日の最初の理念を今一度取り戻さねばならない。

☆では私たちキリスト教会はどうか。主日は主の復活を記念する私たちの安息日、主が与えて下さった解放の日、罪から解放され、新しい命が与えられる日である。信仰者にとって「主日礼拝」こそが本来の安息、神のみ前に出て、祈り、賛美を捧げ、み言葉に耳を傾けることで真の安息が得られる。一方で、心と体に安息を得られたら、あの安息日の初めの理念に立ち返って、隣人に愛の業をなすことも、安息日の務めではないだろうか。アーメン